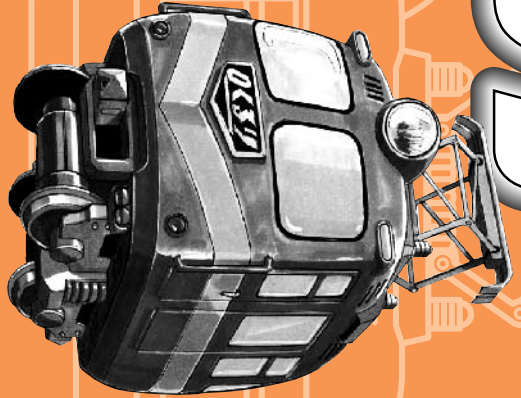
OKAZU新聞 Vol.1

マキシキー

岸田語録 その1

「鉄道はカジュアルですよ」

6月5日にビッグバンドのドラゴンさんとモデルのはなちゃんがパーソナリティを務めるJ-WAVEの番組「アクロス・ザ・ヒロー」に出演した際に出た発言。その日のテーマはマンガだったにも関わらず、一度、岸田が電車マニアだと発覚すると、話はまさに脱線して鉄道の話へ。普段から身近な存在にもかかわらず愛情の注ぎ方がちょっと違うだけで、日陰モノに扱われる自分への自己弁護。そして新しい鉄道への接し方の提案がこの言葉には含まれている。



●編集：株式会社バッドニュース　東京都渋谷区富谷1-43-2 EDIH富ヶ谷5F TEL 03-3468-8110 FAX 03-3468-8115　担当：藤井寿博 レイアウト：小林ジメ(Bad News)
●発行：ビクターエンタテインメント株式会社　東京都渋谷区神宮前4-26-18　TEL 03-3746-5705 FAX 03-3746-5631　スピードスターレコード(制作) 高橋太郎 (宣伝) 石田稔

8月28日(金)

京都メトロ

ワンマンライブ決定！

OPEN 6:30 START 7:00

前売り1800円(ドリンク込み)　当日2000円(ドリンク込み)

NOW ON SALE!

ファンデリア

BN-103 税込 \2,000 (バッド・ニュース)

※10/21マキシシングル「東京」リリース !!

佐藤征史の「大学生日記」

私は原付が大好きです。原付というのは50ccまでのバイクのことですが、私の価値観では250cc以下のバイクのことで、足でタンクを挟まないで乗ってクラッチが付いてないものを指します。

私は高校を出てすぐに中型免許も取り、250ccのバイクに乗ってました。形が大きいくせに馬力がなくて、なかなか面白いヤツでした。しかし京都は交通量が多く、朝、学校に乗っていくのも大変なので、もう1台50ccの原付にも乗っていました。それに1年ぐらい乗ってると、私にはバイクじゃなくても原付でも十分じゃないかと気付いたのです。大きなバイクは市内に止めておくのも大変だし保険も高い。「自分が風になる」とかいうのもどうでもいいし、100km以上出すと風がすごくて危ないし、バイクに乗るより車 or 原付の方がイイナと感じたのです。普通免許は中型免許より先に取ってたのですが、やはり原付ということで90ccのカブに買い換えました。それまで乗ってた50ccの原付も駅で盗まれ事故られ廃車になってしまったので、もう1台90ccのバイクを安価で購入しました。というわけで、私は今2台の原付を乗り分けています。どういう風にかというと、私はバンドマンなので、楽器をいつも持ち歩いているのですが、カブだと肩に楽器をかつがないといけないので大変です。だから楽器を持っている時は足置きのある原付。それ以外の時をカブといった具合にです。また、私は大学1回生の時に発足した原付サークル（といっても4〜5人の友人だけの集まり）に所属しています。それは原付で遠くに行こうというサークルで、時々海に行ったりしています。原付で200km以上走るのは大変ですが、田舎などガソリンスタンドのないところなどはとってもスリリングです。今年はぜひ鳥取砂丘に行こうと思ってます。京都に住んでて原付に乗ってる人は気軽に参加してください（暇な人に限る）。

岸田繁の「各停で行きましょう」

皆さんはどんな電車に乗られるんですか。私が電車に乗る時モーター音を聴くのが仕事なので必ず電動車（モーター付き車輌）に乗車します。電車とは言っても、例えば4両編成ならモーター付き2両、トレーラー2両（2M2Tという）という風に動力は分散されているものが多いです。どうやって見分けるかというと●パンタグラフ（集電装置）の有無●車内の台車上のモーター点検蓋の有無●クモハ、モハなど「モ」のつく車であるかどうかなどです。その事を頭に入れた上で今回は関東地区関西地区を中心に良いモーター音の車輌10選をお届けします。

関東ではまずJR南武線の尻手-浜川崎を走る101系が最高です。昭和32年製でJR最初の高性能車です。昔は両数も多かったのですが、今はここだけ。でも初期高性能車のサウンドは最高です。京浜急行1000系なんかもそうで、昭和46年製までのものは特に最高です。あと京成3100、3150、3200系（初期車）なんかも「ヒューン」というなりが気持ち良いです。また、新しい車輌ではJR京浜東北線209系はインバータ車特有のサイバーな音がかっちょいいです。東横線9000系の減速時の音もトランシーで素敵です。

関西はいい音の車輌が多いです。先述の101系っぽいもので言えば京阪1900系の1914、1916、1918、1926についているMD-3005D改のモーター音がレトロで良いです。元阪急1010系で今は能勢電1000系の東芝製モーターも渋くて鳥肌ものです。あと、昔ラビットカーと呼ばれた近鉄6800系の台車をはく近鉄860系も同系の音がして良いです。が、まあ関西で一番カッコイイのは阪急3300系のディミニッシュっぽいうなるモーターでしょう。人は割とうるさく思うらしいですが僕はうっとり聴き惚れてしまいます。JRでは京都線、神戸線、学研都市線、東西線などで走っている207系（特に0番台）がイカすインバータ系トランス・サウンドを聴かせてくれます。

ディスコ・グラフィー＆ライブ情報

『チアノーゼ /ベースボールゲーム』
（カセット97年8月30日発売 \200）
大阪で行われたイベント『退屈退治』の会場で販売された2曲入りカセット。エンジニアとしてシュガーフィールズが参加している。以後、たまにもライブ会場で売られたこともあるがほとんど出荷されていない。東京ではハイラインレコードのみで販売された。

『もしもし』
BN-102（CD 97年11月21日発売 \1,500）
96年末に結成してから97年夏頃過ぎまで細かにメンバーが録りためた音源からセレクトしたデモトラック集。関西を中心に販売された限定盤。「関西のインディーズ・シーンはこのバンドの出現のためにあった」とまで評された幻の名盤。当時まったく無名の存在だった彼らが一躍その名を轟かせることになった。

『ファンデリア』
BN-103（CD 98年5月15日発売 \2,000）
『もしもし』によって知名度が格段にアップした状況でリリースされた初のスタジオ録音盤にして、目下のところの最新作。ライブで見せるテンションの高さもさることながら、その音楽性の幅の広さもくるりの魅力の一つ。そんな彼らの多様性を見せつけ、くるりの評価をさらに広げた傑作。

●8/8（火）
渋谷屋根裏
（W/ズボンズ、他）

●8/25（火）
リキッドルーム
（W/ズボンズ、他）

●8/28（金）
京都メトロ
（ワンマン）

●9/18（金）
渋谷屋根裏
（詳細未定）

モッくんの「二度は言わんぞ !!」

みんな元気か〜。今年の夏は暑い日と涼しい日のギャップがすごくて体調崩してる人も多いんちゃうかな。梅雨もなんか梅雨らしくないしね。僕の方はと言いますと、なんと今年から部屋にクーラーが付いたので、昨年までは扇風機とうちわで耐え凌いでいたことを思うと毎日が極楽ですわ。しかもクーラーが付いたにも関わらず家賃は据え置き。なんと良心的な大家さんなんでしょう。ホンマに感動したね。ところが、調子に乗って毎日つけっぱなしにしてたら電気代を見て目が飛び出そうになったわ。皆さんもクーラーの乱用にはくれぐれもご注意を。

そうそう、夏と言えば皆さんは何処に行きますか？ 海ですか、山ですか、僕はどっちかと言えば海かなあ。僕は地元が兵庫県なので神戸の須磨海岸なんかはたまに行ってましたが、つい2〜3年前に日本海に行って以来、「海と言えば日本海」になってしまいました。何がイイって水が死ぬほどきれい。沖の方に出ても海の底の方までずっと透けてて、魚が泳いでる姿も見えるという。ホンマ感動したね。個人的には丹後半島にある間人（「たいざ」と読む）っていう所が今まで行った中で一番水が美しかった。久美浜って所も砂浜まで車で入れるので結構便利でよかった。ただ4駆じゃないとストックして脱出不能になるので注意した方がいいかも。あと車で行くなら淡路島の五色浜もいい。砂浜が砂じゃなくていろんな色した玉砂利でできててかなり不思議な感じ。帰りは島の西側を海沿いを走るサンセットラインから海に落ちる夕日が堪能できます。海に沈む直前の夕日が海全体を金色に染める様はなんとも美しい光景です。あんまりきれいで見とれてしまうと思いますが、脇見運転には注意しましょう。なんて言ってる僕ですがまだ運転免許も持ってません。いつも連れてってもらってばかりです。今年はなんとか免許を取りたいなと思ってんねんけど、なかなか暇がなくて……。

ディスク・レビュー Disc Review

wilie wisely / turbosherbet

本人についての細かい情報は殆ど知らないがUSのシンガーソングライターらしい。様々なポップミュージックの要素を消化し、ビートルズ～エルビス・コステロ直系のメロディ、ミスチル桜井君よりコステロしてる声、ザ・フーやフェイセズ、ポール・ウェラーにも通じるR&Bやソウルを下敷きにしたパワー・ポップとしての解釈で、凡百のコレ系シンガーソングライターにはとうてい真似できぬ器用ぶりを見せている。ここ何年かジェイソン・フォークナー、ブレンダン・ベンソン、ヘイデンといったアーチストがよりシンプルな音に回帰していく中、彼の音は逆に万華鏡のようなサウンド・メイキングに向かっている。それでもマニアックにならないのは曲の良さと生楽器の鳴りをうまく活かしているところ。ルーツこそ異なるが、その辺りがベックにも重なる。また、彼のスクラッチノイズやディストーションボイスの使い方の正しさも唯一無比で、久々に全曲通して聴ける超好盤。（岸田）

Beastie Boys / Hello Nasty

ビースティをヒップホップのアーチストとは思っていないが、この作品では以前よりもヒップホップ的はアプローチに近づいているようだ。パンク色は薄れギターノイズや鋭いスネアの音は鳴りを潜めているが、逆にルーツ回帰する中でどれだけ「同時代性と音楽そのものの美味しさをリンクさせるか」という点で大成功しているのだから。ヘッドフォンで聴くと津波のように渦巻いては消えるSE、アーシーに響く低音、ソウルフルなメロディも垣間見られる。彼らがオンエアされても気持ち良いのは普通のアーチストから案外軽視されている“ポップスとしての完成度”をとことん追及しているからだ。他ジャンルで言えば、ブレイク当時のニルヴァーナやスカコアという情けない括りの中で健闘しているノーダウト、スラッシュ勢では一気に大革命をおこしたセパルトゥラなどと同じく、肯定的な意見として“売れるポップメイカー”としての共通項を感じさせる。（岸田）

Smashing Pumpkins / Gish

『メロンコリーそして終わりのない悲しみ』というモンスター・アルバムの爆発的ヒットによってロック・バンドとして確固たる地位を築いたスマパンのデビューアルバムがコレ。サウンド的にはギターを何本も重ねた分厚い音の塊をタイコが気持ち良く聞かせてくれている。ビリーは父親からリズムの重要性を教えられたそうで、どのアルバムにおいてもタイコとベースのリズム隊をしっかり前面に押し出されている。このアルバムでも今はなきジミーのタイコも１曲目から楽しませてくれるし、ダーシー（ビリーかも？）のベースもしっかりボトムをキープして音に厚みを出している。既にこの頃からサウンド面でも、ビリーの作詞でもスタイルが確立されている。これを発展させたのが『サイアミーズ』であり『メロンコリーそして終わりのない悲しみ』なのだ。だから『Gish』は97年までのスマパンを語る上で決して外すことができないものである。（佐藤）

Sean Lennon / Into The Sun

ショーンのデビューアルバムは私の98年上半期No.1アルバムだ。私は小学生の頃、彼がヨーコオノとともに整髪料のCMに出ていたことぐらいしか知らなかったのだけど、母親のバンドでギターを弾いたりベーシストとして日本で幾度かプレイをしたりしていたそ。そしてチボマットの本田ゆかとこのアルバムも完成させた。ロック、ボサノバ、ジャズ、ソウルなどのエッセンスをちりばめ、澄んだメロディとここぞという時の歪んだベース、ベースラインから作ったようなロマンチックなコード進行、羽鳥美保のしみわたるコーラスにギター、ベース、ドラムのほとんどを自身が演奏していることからくる透明感ある暖かみ、偉大な父親の血を引いていて、しかもグランドロイヤルからとくれば間違いなし。私より1歳上のショーンは恋をして大人になり、その若さで官能的に音楽を伝えてくれる。でも一番うれしかったのはこのアルバムにジョンの父親としての存在があったことだ。（佐藤）

SpaceHog / Chainese Album

久々に「お、カッコええやん」と試聴機を前にニンマリしてしまった。最近のバンドの中ではかなり好きです。「ネオグラムの先駆者」なんて肩書きで登場したこのバンド、確かにボーカルはデビッド・ボウイ大先生の影響大やし、リズムのアプローチもグラムのおいしいところが随所に折り込まれてる。この辺の確信犯ぶりが他のバンドにはないスパイスになってるんやろうね。だからといって回顧的とは違ってて、サウンド・アレンジには90年代的な要素も随所に垣間見えるし、グラムっぽくないさりげない歌ものの曲もムッチャいいし、センスの良さと懐の深さを見せつけてくれてる。ヘタするとキワモノになってしまいそうなバンドやけど、そのスレスレの辺りでポップさを追及してるバランス感覚にこのバンドのカッコ良さがあるんとちゃうかなぁと思う。う～ん、なんとしてもライブが見たい。来日する時は誰か教えてくれ～。（森）

The Police / Syncronisity

スティング率いる世界最強のトリオバンドの1つ、ポリスが83年にリリースした事実上のラストアルバム。なんか最近も再結成するだので世間を騒がせてたけど、それぐらいの影響があったんやろね。実際、このアルバムは15年も前の作品とは思えないほど今だに色褪せないパワーを放ち続けてます。この人達のカッコ良さって、やっぱ1人1人が強烈な個性を放ってるとこ。3人がお互いを剥き出しにして戦ってて、ある意味K1グランプリみたいな緊張感が全編に漂ってんねん。それ以前のアルバムもその感じは出てるけど、実験的なところが多くて。それはそれでカッコええねんけど、このアルバムは実験を一通りやり尽くした後の洗練された感じが出てて個人的に一番好き。このアルバムのリリース後に行われたツアーのビデオが出てるけど、それがまたカッコええねん。特にスチュワート・コープランドのドラムを叩く姿はカッコ良すぎて涙出るよ、ほんま。（森）

くるりの「お店の人とこんにちは」

くるりの音楽性にはさまざまな要素があふれている。それは『ファンデリア』を聴いていただければ一発でわかっていただけると思う。平均年齢22歳と若い割に音楽的なバックグラウンドも豊富な彼らとくるりを応援してくれているタワーレコード京都店のJ-POPインディーズ担当のバイヤー小室さんとでルーツミュージックについて語ってもらった。

小室:何から音楽に入りはったんですか?
岸田:昔から音楽好きやって、買うて聴く前からポンキッキとかあるじゃないですか、ああいうのを素直に受け止めてた方なんですよ。ところが一番最初に買ったんはクラシックでクリークの『ペールゲント』ってやつなんですよ。洋楽で一番最初に買ったんが『ロッキー4』、サバイバーとか入ってるやつ(笑)。
佐藤:僕はロックに目覚めたのは遅くて高校に入ってから始めてカッコいいなと。それまでにクラプトンとかドアーズとか誰でもが聴くようなのはあったんですけど。始めてジミヘンがすごいと思いまして。
岸田:形から入りやがってコノヤロー!
小室:僕も近いもんがありますね。
森:僕は中学くらいからクラシック聴いてたんですよ。
岸田:バリバリデキのええバンドや、俺ら。
森:始めて買って LPってベートーベンの『田園』なんですよ。高校もずっとそうでずっとブラスバンド部に入ってたんですけど、それでタイコ叩けるということでバンドに誘われて、ガンズとかエアロとかその辺聴いて。
岸田:ハードロックはガチガチに通りましたよ。ガンズ、メタリカとか…
小室:グランジとかは?
岸田:ニルヴァーナとかはめちゃめちゃリアルタイムでしたから。特に好きやったわけでもないんですけど、ビートルズ特に好きちゃう人でも誰でも知ってるし根付いてるもんじゃないですか。それと一緒で、特にハマったわけじゃにですけど影響はありますね。
小室:ニルヴァーナは大きいですよね。僕より下の世代には必要不可欠っていうか。
岸田:ハマる人はパールジャムとかサウンドガーデンとかマッドハニーとかハマるんでしょうけど、そっちにはいかなかったですからね。
小室:ちゃいますもんね、ニルヴァーナだけ。
岸田:ちょっとね。だからスマパンとストーンテンプルパイロッツだけは結構好きでしたね。商業的なやつ(笑)。聴き心地いいんで。

くるりの「ちょっとイイ話」

御存知の方も多いかもしれませんが、7月13日にIMPホールで開催されたスピッツが企画したイベント『ロックロックこんにちはVer2.0』にくるりは出演してきました。
この日の出演はスピッツをはじめ、サニーデイサービス、フラワーカンパニーズ、九州からはギルカバー&ザ・モンキーという錚々たるメンバー。くるりのみんなもちょっと緊張気味でしたが、楽屋や打ち上げの席でいろんなバンドの方とも仲良くなれました。特に仲良くなれたスピッツとサニーデイサービスのメンバーよりこのフリーペーパーのためにコメントなどもいただいたりしました。
では、まずスピッツのみなさんから。
草野マサムネさん「今日はくるりをはじめ、こんなに若いバンドと一緒のイベントに出演でき、一緒にメシも食え、光栄に思ってます。オレらも若い人たちに負けないようにがんばりますので、東京に来たらぜひ一緒に飲みましょう。新しいCDが出来たら、また聴かせてください。今日のイベントでも3人バンドなのに厚みがあってとてもいい演奏だったのです、今度は客席から観たいと思っています。やる時はまた呼んでください」
三輪テツヤさん「(どんなコメントでもいいとの質問を受けて)曙がストレートパーマにしました。気になります」
崎山龍男さん「(三輪さんと同様の質問に対して)やっぱジョンウェットンルイスじゃないですか」
田村明浩さん「(今日の出演バンドは)みんなエブリバンド・イズ・グー」

読者の穴

読者の素朴な疑問に答えるこのコーナー。今回は最初ということで、くるりのライブや『ファンデリア』のアンケートハガキの中に寄せられた疑問にお答えします。今回は鉄道ネタばかりということで、岸田先生にお答えいただきます。

●質問
「クモハやモハ、キハというのは一体何なんですか?」(岡山県32歳)
●答え
クモハ207-1502という番号があるとします。「ク」とは制御車、すなわちコックピット=運転室のある車のことを言います。「モ」はモーター付き電車のこと。運転室があってモーターなしの車輌は「クハ」、両方ない場合は「サハ」で、「サ」はトレーラー車、すなわち引っ張られている車輌のことを言います。「ハ」は昔で言う中流階級専用の3等車のことで、今の一般車です。1等車であるグリーン車は「ロ」で、仮に制御電動車でグリーン車なら「クモロ」となります。現在姿を消した〒貨物車は「クモユニ」、食堂車は「クモシ」。またキハの「キ」は、電化の進んだ都市部では見ることができませんがディーゼル車のことです。

●質問
「最近京浜東北線や大阪の地下鉄が新しくなりましたよね。なんか音がすごい未来チックなんですけど、それはどうしてなんですか?」(長岡京市?歳)
●答え
それは制御装置が変わったからなのです。昔、電車は直流モーター(原理はラジコンモーターと同じ)で走っていました。それは速度制御が容易だからです。メンテナンスこそ大変ですが、電車発明から100年以上直流モーターが使われていました。しかし近年、メンテナンスの不要な交流モーター(扇風機などの家電と同じ)に注目が集まりました。交流モーターは速度制御が難しかったのですが、VVVFという制御装置の開発によって、省エネかつ高性能な運転が可能になりました。そして1986年頃から急速に交流モーターが普及し始めたのです。初期のものは音が大きかったのですが、ここ最近のものは低騒音に変わってきています。

というわけで皆さんも何かくるりのメンバーに聞きたいことがあればどしどしお便りください。質問は別に鉄道のことじゃなくてもいいからね〜。質問の宛先は編集部まで。